

英語の

広島大学大学院教授 新田玲子

正しい学習方法とは

〈後編〉

「英語と聞いただけで、頭が痛くなる方も多いのではないのでしょうか？ 学生時代の辛く、悲しい思い出がある方のために、2回に分けて、「英語の正しい学習方法とは」を特集します。

今回はその第2回目。お話しただくのは、広島大学大学院でアメリカ文学を中心に研究され、「英語を使うアメリカ文学はみなさんを馴染みのない世界へと誘い、そこでの新鮮で異質な体験を通して、みなさんの人生の選択肢や可能性を広げてくれるでしょう」と説く新田玲子教授です。

略歴・広島生まれ。広島大学文学部卒業後、広島大学大学院文学研究科博士課程へ。広島経済大学講師、信州大学人文学部助教授、同人文研究科助教授を経て、広島大学文学部助教授に就任。同文学研究科教授に就任。

主な著書：『サリンジャーなんかこわくなく』（2004）、『アメリカ映像文学に見る少数民族』（共編著）（1998年）『すべての夢を終える夢』（翻訳、ウォルター・アビッシュ原作）（2001年）など

さて、辞書を活用することが英語力を根底から鍛え、高めてゆく最良の方法ですが、その辞書を使いこなすには、少々面倒であっても、発音記号や基本文法といった、英語の基礎知識を学ばなくてはなりません。

最近では、英語の初習段階で発音記号を系統だって教えていないようので、文学部で英米文学語学を専攻している私の学生たちでも、発音記号を正確に発音できなくなっています。「それでは困るでしょう」と聞くと、「電子辞書に音声機能が付いているから」という答えが返ってきます。これは簡単な日常会話レベルの英語にしか触れていない証拠です。音声機能が付いている単語は使用頻度が高いものに限られていますので、英語の幅を広げようと思えば、即、その枠から外れてしまします。せっかく辞書を引いて学んだ単語でも、正確に発音できない単語は記憶に残りにくいものです。それ故、調べた単語を自分のものにし、語彙力を充実させてゆくには、どうしても発音記号が必要になるのです。

発音記号は通常、辞書の初めか終わりに、発音の仕方と共に、掲載されています。それで音が作り出せない場合は、テレビやラジオの英会話など、発音の見本を示してくれているものを利用して、発音記号を見れば正確な発音ができるようにしておいてください。

次に、単語を引けば、その機能が「品詞」別に分類されています。文章の中で単語がどのような役割を果たしているかが分かれれば、単語の意味を全部読むといった無闇な探索で時間を浪費することを避けられます。また辞書によつては、動詞の用法を、¹to do²とか³doing⁴、あるいは⁵to do⁶とか⁷to do⁸などと表記して、説明してくれているものもありますし、単語の用法の説明で、「関係詞」とか「疑問詞」といった専門用語も出てきます。使用される文法知識はごく限られたものですが、文法に自信のない方は、簡単なもので構いません。文法書を購入し、まずひととりの基礎学習をされたうえで次のステップに進まれるよう、お勧めします。

4. 真の異文化コミュニケーションを目指して

先に、「heart and mind」に適切な日本語訳が付けられない人は、その逆の英作もうまくできないと言いましたが、ここでもうひとつ例文を挙げてみましょう。

電車を降りようと席を立った男性が、傘を忘れているのに気付き、背後に座っていた若者が上のように呼びかけました。

さて、あなたならこの英文をどのように訳されますか？

かつてこの文章を学生に訳させたところ、「旦那、傘が…」と答え、私を大いに笑わせてくれました。おかしいのは、「傘が…」の部分ではありません。ここは相手の注意を促しているだけですから、「傘が(残っていますよ)」でも十分でしょう。問題となるのは、「旦那」の部分です。確かに、辞書には「sir」の訳語として「旦那」が出てきます。ですが、江戸時代の遊び人ならともかく、昨今の日本の若者が、電

車のような公的な場所で、一般の男性に向かって「旦那」と呼びかけることはまず、考えられません。実際、少し詳しい辞書なら、「sir」はそれ自体、訳さない場合が多いと注意書きされています。敢えて訳すにしても、「あの、傘をお忘れですよ」と、「sir」の部分は、本来意図された「呼びかけ」機能の言葉に置き換えるべきです。

今日の英語教育は大意が取れば良いとし、英文の正確な和訳を求めることを忌避しがちですが、英語初習者は「できるだけこなれた日本語に訳し直す」訓練を積むべきです。というのも状況から「Sir, your umbrella…」の内容を推察できない方は、まずいではないですが、ふさわしいこなれた日本語にできていなければ、いざ「あの、傘をお忘れですよ」と声をかけようとしたとき、「あの」「Well…」「傘をお忘れですよ」「You forget your umbrella…」といった、おかしな英文を編み出しかねないからです。正確な日本語訳を作る訓練は、正確な英語が話せるようになる訓練でもあるのです。そして正確な日本語訳を作るため

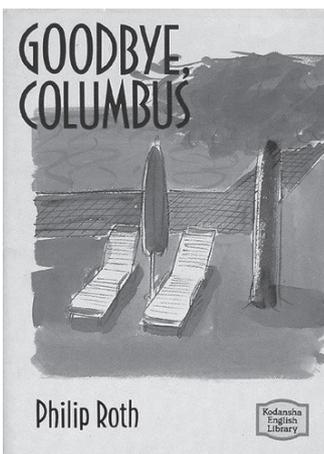
に、辞書を最大限に活用してゆくわけですが、その教材としてお勧めしたいのが、英語による作品を読むことです。「his」ひとつ取っても、イギリスとアメリカではもちろんのこと、アメリカにおいても北部と南部では、用いられ方が大きく異なります。「his」のように、日常的に用いられてきた単語であればあるほど、文化的・歴史的影響が大きく、その違いを踏まえ、使われる場面を様々に体験しなければ、その単語を正確に使えるようにはなりません。こうした幅広い運用は、会話の定型スキットでは十分に対応できません。また、いくら交通の便が良くなった今日でも、すべてを直接、経験から学ぶというのも、なかなか難しいことでしょう。そこで英語作品を通して、英語が使われる世界を様々に疑似体験してゆくことがお勧めとなるのです。

映画やテレビドラマで使われる英語の脚本を学習したうえでなら、それは可能です。ですが、「聞き流し」学習で言及したように、知らない英文を耳で聞いただけで、それが即、身につくことはありません。従って、何の予習もなく映画やテレビを見た場合には、すでに知っている英語の範囲内でしょうか学べません。映画やテレビといった映像を利用すれば、文字だけの学習よりも楽しく学べそうに見えますが、「聞き流し」ならぬ「観流し」は、学習方法としては決して効率が良いものではありません。それを有効利用しようとするなら、机に座り、使われている英語を辞書で確認しながら読む作業が、やはり不可欠となるのです。

英語の作品には様々ありますので、お好きなジャンルや作家のものを讀まれたらよいのですが、内容が単純で、物語の展開が日本人にも推測可能なものは、「異文化」を学ぶおもしろみに欠けるうえ、英語の正確さを身に付ける助けにはなりません。従って、正確に英語を読む訓練を第一義の目的とされるなら、ネイティブの常識をも覆して笑わせるような、優れたアイロニーやユーモアに溢れる作品を選んでほしいかがでしょう。意外な展開を追うためには、英語を正確に把握する細心の注意が必要ですが、苦勞して作品を理解したご褒美に、笑いを伴った新鮮な思考と出会えるなら、先へと読み進む励みになるのではないのでしょうか。

このような作品の一例として、たとえばフィリップ・ロスの『さようならコロンバス (Goodbye Columbus)』に収録されている短編、「ユダヤ人の改宗 (『The Conversion of the Jews』)」を挙げることができます。この短編は日本語訳が出ていますが、間違いが多いので、辞書を引きながら、自力で挑戦してみる価値があります。

物語の中心は十三歳の少年たちで、会話を中心とした物語展開は軽妙で、



語彙も現代口語レベルです。また、純粋な少年の抱く素朴な疑問が、大人社会の固定化された常識とぶつかって起きる大騒動が、ドタバタ喜劇的要素を取り入れて面白可笑しく描かれ、読後感も爽やかな秀作となっておりますので、どなたにも楽しんで頂ける作品であると思います。

ただ、さほど難しい単語や構文が使われているわけはありませんが、英語から推測でものを読む癖がついている学生たちには、常識や想像に反した展開が旨みのこの作品は、なかなか骨の折れる教材のようです。しかし「推測」を許さず、正確な読みを必要とする作品を、辞書を引きながら丁寧に読んでゆく訓練なくしては、私たちの思考の枠を超えた、本当の意味での「異文化」に触れられる英語力を育ててゆくことはできません。ですから、骨の折れるあいだは、まだ自分の英語が不確かなのだと自戒しつつ、努力を重ねて頂ければと願います。

さて、文学作品を正確に読む訓練をひとりでもやっても、間違っただま読んでしまうのではないか、意味が十分取

れないで終わってしまうのではないかと、懸念される方も多いことでしょう。確かに、理想としては、優れた指導者のもとで、しっかりと作品を読み込むことができれば、それに越したことはありません。しかし現在ではそうした学習方法が時代遅れと見なされ、「英文科」が廃止に追い込まれ、「原書講読」の授業が激減しつつあります。このように、学生ですら授業で英語の作品をじっくり読む機会を失いつつあるのですから、一般の方々がそうした機会を得ることはなかなか難しいと言えるでしょう。

そこで利用して頂きたいのは、注釈書付きの英文学作品です。ペンギンブックスに注釈を付けたもの、大学テキスト用に編纂されたもの、あるいは対訳付きのものなどが、いろいろな出版社から出ています。また、翻訳書を横に置いて読むことが助けになる場合もあります。もっとも、注釈書はすべての英文を解説してくれているわけではありませんし、翻訳には誤訳や意訳がしばしば見られ、必ずしも英文の理解を手助けしてくれるとは言えません。

従って、どの場合においても、基本は、一生懸命辞書を引きながら、根気よく本を読み続けてゆくことになりま

5. 英語らしい英語が使えることを目指して

英語らしい英語が使えるようになるには、定型会話で学んだ英語だけでは不十分だということを納得してもらうため、私は英語教員免許状更新の講習会の冒頭、「行ってきます」、「行ってらっしゃい」、を英語で答えてもらうようにしています。

「こんにちは」という挨拶は、誰でも英語で言えるでしょう。ですが、家族と一緒に暮らしておいでの方なら、毎日使っているはずの、「行ってきます」となると、英語教員の方々であっても、なかなか答えられないようです。前回の講習会でも、皆さん、当惑顔で

したので、「これまで読んだ本、鑑賞した映画やドラマの中の、そうしたシチュエーションを思い起こしてください」とアドバイスしました。それでも、どなたも思いつかずに、お一人、勇気ある方が、「間違っているのはわかっているけれども、授業を先に進めるために敢えて、『I'm going.』ですか、と尋ねます」と答えて下さいました。

「行ってきます」の日本語を英語に置き換えたものが『I'm going.』ですが、それではもちろん意味をなしません。

「こんにちは」が文字通りの『Today.』ではなく、英語で出合いの挨拶として用いられる、『Hello.』とか『Good morning (afternoon, evening).』

に当たるように、「行ってきます」も、アメリカやイギリスで、朝、出かける際、夫が妻に、子供が親に言う言葉が求められています。そういう場合に用いられる表現であれば何でも良いのですが、しばしば耳にするのは、『See you later.』だと思います。『See you later.』と聞いて、「あ、それなら知っている」と言われる方は少なくないのではないのでしょうか。そういう方はこ

の表現を「さようなら」とか、「またね」と、記憶されているため、「行ってきます」という日本語にならないのです。

前回の免許更新講習会では、ここまですべて説明して、再度「行ってらっしゃい」を考えてもらうと、『Have a nice day.』

という正解が出ました。もちろん、それ以外の見送りに使われる表現なら、何でも構いません。要は、英語を英会話の定型シチュエーションで学習した

だけの人は、こうしたよくよく知っている表現でも、幅広い状況で使つてゆることができないということです。英語らしい英語を心がけるなら、様々な

状況でどういう英語が使われているか、もっと幅広く知る必要があります。また、このような簡単な文章でも、日本語に英語の単語を置き替えただけでは通じる英文が作り出せないことから

も、和英辞典や和英の翻訳機能などを利用した、日本語から「英文を作り出す」方法では、決して英語らしい英語はできないということも、理解して頂けるのではないのでしょうか。

英文らしい英文を作る第一歩は、自分が表現しようとしている場面で使わ

れていた英語を思い出すことです。それが叶わない場合も、できるだけ自分が知っている「正しい英文を援用する」ようにしましょう。どうしても知らない表現が必要となる場合は、必ず使用する単語や語句の用例を辞書で確かめてください。そして、「正しいと確信できた用例を変形」させることで、求める文章を作り出してゆきます。この、

用例を変形させる段階で、ふさわしい単語や短い語句を探したり、実際に変形させた英語が正しいかどうか確認したりするためであれば、インターネット辞書やインターネットの翻訳機能を活用しても構いませんが、機械翻訳に頼りすぎないように注意してください。

こうして作り出した文であれば、語法的な間違いは最小限度に押さえられているでしょう。

もっとも、そうした「正しい」英文を積み重ねてもなお、英語らしい英文になつていない場合は多々あります。その一例が、文構造においてだけでなく、文章全体の論理展開が日本語的発

想に拠っている場合です。この欠点は、何かについて自分の意見を英語で

書いてもらうとすぐにわかります。と

いうのは、日常会話が相当に達人な人でも、文と文の繋がりを明確にしようと、接続詞機能を持つ副詞を次々に文頭に置いてしまうからです。「しかし」、「それ故」、「さらに」、「このように」といった副詞といえば、「however」、「therefore」、「furthermore」、「thus」といったものが挙げられますが、他にも、「and」、「but」、「so」のような、本来の機能が文と文とを繋ぐ接続詞で、文頭に置く副詞的用法を書き言葉で用いる場合は注意が必要なもので、頻用されがちです。

これは、日本人が情感を重んじ、断定を避けた曖昧さを残す婉曲表現を好むことによります。そのため、いざ論理的に明快な文章を心がけると、文と文との繋がりを明確化し、論の流れがゆく方向をはっきりさせる接続の言葉を、後続の文頭についつい置いてしまうのです。一方、英語は極めて理性的、論理的な言語で、常日頃から、文章を積み重ねてゆくだけで論理の流れを作り出します。その結果、接続詞を多用した文章はかえってまどろっこしく、

未熟な印象をもたらします。

こうした日本文と英文の違いを学習するには、自分が書くこうとする内容にふさわしい英文を日頃から読み付けておく必要があります。すなわち、流麗な英文を書きたいのであれば、流麗な英文に馴染み、論理的な英文を書くには、論理的な英文に親しむ。そして、自分が読んで学んだものを参考にしながら、英文を作りだす訓練を積んでゆくののです。

日本語の場合でも、親しい人への手紙と、法律文書では、用語も文体もまったく異なります。英語も同様で、TPOによりふさわしい英語が自ずと決まってきます。自分はどういう英文が使えるようになりたいのか、まずその点を明確にし、その参考になるような作品の精読を増やしてゆくの、効率の良い学習方法と言えるでしょう。

6. 最後に

英語は一日にして成らず。

英語は、今日、これだけやったから、こんなにわかるようになったという、

眼に見える実感がない。それどころか、やっても、やっても、なかなか身につかないと、思わず知らず溜息がでる——このことが、英語学習において一番大きな壁となっているのではないのでしょうか。その不安を押してこつこつ積み重ねてゆくと、ある時、振り返って、「ああ、昔と比べて、随分できるようになったなあ」と感慨に耽れるものなのですが、そこに至れるのはほんの一握りのようです。

英語学習のもうひとつの壁は、入口の難しさにあります。日本語を学ぶ外国人がよく言うことですが、話し言葉のレベルでは、日本語は英語よりも習得しやすいそうです。というのも、日本語法には柔軟性があり、動詞を最後につければ、あとの語順はあまり問われないからです。これに対し、英語は文型がしっかりしているので、語順や語法など、ある程度のを覚えなければ、そこそこの英語が使えるようにならないのです。反面、読み書きのレベルで言うと、日本語にはひらかな、カタカタがそれぞれ48文字あるうえ、漢字という無限大のハードルが待

ち受けていますが、英語にはアルファベット26文字しかないので、マスターするのが簡単だと言います。

従って、外国人が日本語を学習するときは、まず会話から入り、そこから少しずつ、漢字を学びながら、丁寧語、謙譲語などの表現にも手を広げてゆくと、意欲を削がずに学んでゆけます。一方、英語の場合は、書き言葉から入り、文章を眼で見、口に出して読み、そして耳で聞きながら学習してゆくの

が、基本文型を確実に習得するのに最も適した方法で、初めは時間がかかっても、長い眼で見ればこれが一番効率の良い学習法と言えます。

そういう意味でも、伝統的な英語教育は決して間違っていないかったと、私は考えています。早い段階で英語に耳を慣らすのは良いことですが、ネイティブの子供たちが英語を習得するのと同じ方法で、外国人たる私たちが英語を学ぼうとすることには、所詮無理があります。外国語には外国語にふさわしい学び方があり、英語を外国語として学ぶときは、発音記号や文法事項といった基礎を固め、辞書を駆使しつつ、

読み書きの訓練を積みながら、徐々に会話を増やしてゆくべきでしょう。

グローバル化が進む現在、私たちが今一番必要としているのは、手振り身振りでも何とか通じるような内容を英語で伝えることではありません。異なる歴史や文化で育った人たちの思考を正しく把握し、彼らの「異文化」を彼らの視点から学ぶ一方で、私たち自身の立場や主張を世界に向けて、説得力のある意見にして発信し続ける能力こそが、今、最も重要なのではないでしょうか。そういう能力があれば、諸外国の人々と摩擦を起こすことなく、互るいは、生じた摩擦は緩和しつつ、互いに切磋琢磨しながら、共により良い未来を目指してゆくことができるはずです。そうした明るい未来を実現するためにも、目先の簡単な会話に満足せず、腰を据え、辞書を引きながら本をじっくり読むという、英語学習の本来の姿に立ち返り、真の意味での「異文化コミュニケーション」を目指してもらえればと、願ってやみません。■